週末人 ミニ洞窟

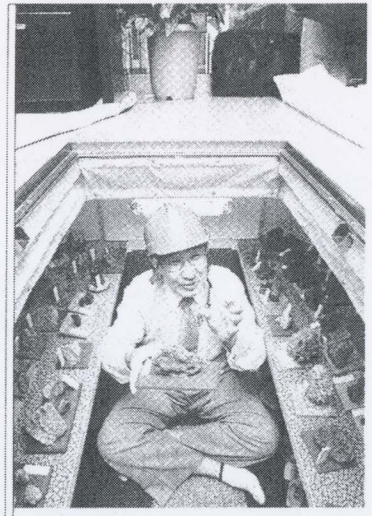
人の数だけ週末がある。「達人」の余暇をあなたに

古代の空気を感じる空間

皆さんは、洞窟と聞いてどんなイメージを抱きますか。狭く、じめじめした岩だらけの空間。コウモリが飛び交う不気味な暗闇。川口浩探検隊がナゾの生物を探す怪しい世界…。こんなマイナスのイメージをひっくり返し、正しい洞窟の魅力を伝えるべく、立ち上がった大学教授がいる。自宅に「ミニ洞窟」を作り、希望者には観覧させてくれる。自分が楽しむほか、子供たちに洞窟で神秘的な体験をさせて夢をもってもらうのだという。深い山に分け入らなくても大阪市西淀川区で体験できる洞窟を訪ねた。

自宅に洞窟を作ってしまったのは、大阪経済法科大学の沢勲教授(六六)。もともとは半導体研究が専門分野だが、小学一年のときに初めてたいまつを持って洞窟を探検し、魅力に取りつかれたという。半導体の材料であるシリコンを含む岩石探索もあり、三十年ほど前から「趣味と実益を兼ねて」(沢教授)国内外の洞窟をめぐり、約二百カ所を制覇。ついに自宅新築にあわせて洞窟を作ってしまった。

西淀川区野里の住宅地にある細い路地を抜けて自宅を訪問すると、外見は普通の二戸建て。庭先にあると想像していた洞窟は見当たらない。招かれて書斎に入ると、ニコニコと笑う沢教授は「じゃあ、見ますか」とおもむろにテーブルを動かし始め…。中に入らせてもらうと、



自宅に「ミニ洞窟」を作った沢勲教授。「今の子供たちには神秘的な体験が必要」と話す＝大阪市西淀川区

た。なんと、書斎の床に観音開きの扉。扉を開けるとポッカリと空間があいていた。

ミニ洞窟は、幅約一・三㍍、奥行き約一・五㍍、高さ約一㍍。大きめのユニットバスのような大きさだ。取材したテレビリポーターが「床下収納のよう」と表現したというが、まさにそんな感じ。なかには教授が世界各地で手に入れた鉱物約八十点がズラリと展示されている。「すごい。しかし、これって洞窟…」と頭にいくつもクエスチョンマークが浮かんだ。

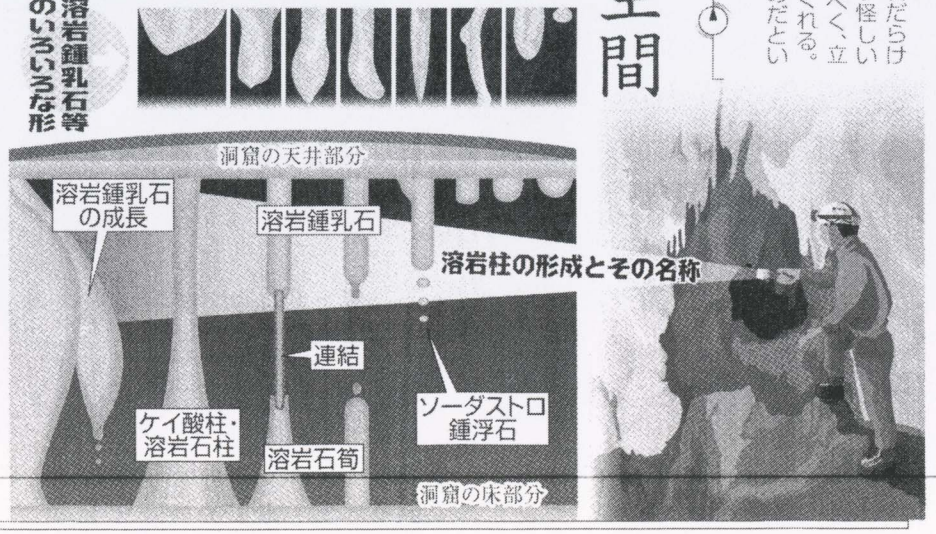
教授の説明が続く。「深さ二㍍まで掘って、砂利や砂を入れて、湿気対策のシートを敷き、そのうえからコンクリートで固めた。換気扇やライトを付けて…」。中に入らせてもらうと、かなり狭い。扉を閉められると、パニックになりそうな気がした。

だが、沢教授は「ここが落ち着くという。「雑念が離れて、ここで考えるといいアイデアが出るんです。寝転んでよく瞑想してます。檀おけの予行演習ですよ。あはは」と笑う。「大阪城やベルサイユ宮殿には地下室がある。何でうちにはないんだって」と、どこまで信じていいのか分からない壮大な建築理由を語ってくれた。

約五年前から洞窟設置の計画を立てていたという沢教授。今年二月からの自宅新築に合わせて実行に移したが、家族には反対されたという。「ここはオレの世界や。二階は好きにせい」と奥さんを説得。「やめた方がいい」という建築屋さんにも「オレがやると言ってるんや」と一蹴。建設費は百万円以上という。

設置後は、ホームセンターでフロアマットを買って、自作で床を整える。岩石を削り、「いい感じ」に板に接着し、それぞれに採取場所や名前をつける作業。すべてが楽しみだ。周囲があきれるのも顧みず、夢に向かって突き進む趣味人の王道を歩んでいる、といえるだろう。

洞窟の魅力について沢教授は「地上にない味わい。神秘。人が入ったことのない場所もある。空気がきれいだし、食事の味も違うんですよ」と力説する。「四十五万年前にできた洞窟なら、当時の空気が残っているかもしれない」とロマンを語る。別室にはヘッドライトなど洞窟探検用の装備をつけたマネキンも飾られていた。

もっとも、自分の楽しみだけではないのが、大学教授らしさ。「いまの子供たちには神秘的な体験が必要。内なる心のシグナルを聞くことが潜在意識の開発につながる。それには洞窟がぴったり」と話し、子供など一般向けに「沢洞窟」を公開するという。「普通、家に洞窟は作らないですよ。でも人と違うことをするから、ノーベル賞たってもらえるんです。人のしないことで、社会に貢献できることをやる」

洞窟の見学希望者はファクス(06・6471・6686)で沢教授宅へ申し込む。